ヨーロッパかけ足旅行日記より

嘉　納　愛　子

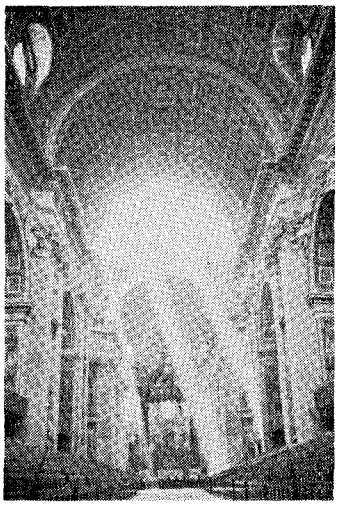
此度の私の旅行は漫然と只ヨーロッパの土をふんでくればよいと思ってとび立ったのである。先づイタリー，ローマに着く。ジェット機が早いので遠くへきたという感じは全くなかったが，はるか後に日本を残してきた様にフット感じる。

カラカラ浴場跡の野外劇場

イタリー「ローマ」

2600年の歴史とその遺跡，廃墟，寺院，彫刻，そして美しい噴水，キリストがひかれて行かれたといふ石だたみの残っている道アビッツァ街道，偉大なるヴァチカン宮殿，暴君ネロがキリスト教徒をライオンに云々のコロッセオ等，現代建築のムジックアカデミー，又4年前のオリンピックの跡，ここはトラックの周囲全部に5メートルおき位に大きな異なる姿態の人間裸像がぐるっと数知れず取りまいている。さすがローマである。近代ムードと全く対照的な古都ローマ，明るいが何となく大きな力。「宗教」にすっぽり包まれてしまっている。短時日ではとても廻り切れない。

キリスト教（カトリック）の総本山ヴァチカン宮殿は巍然とそびえている。中へはいる為に頭にはベールをかぶる。ミケランジェロの天井画，ラファエルの壁画，高い丸天井からさし込む神秘の陽の光，ステンドグラスの聖画，聞こえぬパイプオルガンの音が何となくきこえる様に耳に感じる。敬虔な気持に浸る。



陽光さしこむヴァチカン宮殿礼拝堂

遺跡の一つカラカラ浴場は野外劇場として夏季夜間だけオペラが上演されるならわしで，幸運にもなじみ深いアイーダを見る事が出来た。

ステージの両端は暗い天をつく様な太いこわれた石の柱，アイーダ，ラダメス，アムネリスは云うに及ばずわけてアイーダは可憐さが感じられる黒人歌手である為尚一層実感をおぼえる。第二幕二場の旋凱の場面では7，8頭の白馬がはるか奥の方から蹄の音高く走り出て来る。第三幕ナイル河畔の

夜の場ではラクダがむっくり起き上りノッシノッシとはいってゆく。

いつしかファラ治世下のエジプトにひき入れられ，拍手にハット我にかえると，冷々と寒さを感じる。

ひな段観客席の後ろ唐傘の様な形のイタリヤ松の並木の林に真夜中一時の月が真赤にはえている，その影を脊にしながら終幕牢獄の哀詩を悲しむ，私は呆然とする心の落付きを暫く取り戻す事が出来なかった。

「ナポリ」—「カプリ島」—「ソレント」

映画「終着駅」で知られたテルミ駅よりナポリに向う。どこでも改札口と云うものは全然無く切符は車内で検札され，従って切符は手許に残る事になる。カプリ島は火山岩で，美しい地中海のブルー，美しい花，点々と世界中の富ごうの白亜の別荘，おいしいオレンヂは豊富に，まことに美しい楽しい避暑地である。ドビュッシーのピアノ曲でおなじみの「アナカプリの丘」はカプリ島の一番高い所（標高2,300米）。船でソレントにわたり港の傍で楽しいイタリヤ民謡の声にひきつけられて，その声のするレストランへ昼食にはいる。男性ソロはギター二つマンドリン二つの伴奏でテーブルを歌いながら廻り歩いている。なつかしい唄の数々にききほれる。100リラ（50円）お盆の上にのせてアンコールを乞うと又サンタルチヤ，かへれソレント，時間にせまられて漸く立ち上る。

「ポンペイ」—「ミラノ」

話にきいている発堀された遺跡の数々。紀元79年ヴェスビオス火山の大爆発で一瞬に埋没した，ローマ時代休養地として栄えた町が彷彿とする。ミラノと云へば私達はすぐにスカラ座と思うが，これは残念ながらシーズンオフで上演はなく内部見学する。ナポレオン帝の席，エリザベス女王の席，数多くの過古のオペラ作曲家，指揮者，独唱者の名画や彫刻等をみる。若い男のガイドが色々と名曲のテーマを口笛で歌って楽しく説明してくれるのもいかにもイタリーらしい。

スイス「チューリッヒ」

ミラノのセントラル駅よりチューリッヒに向う。沿線は，高原から段々と山丘地帯にはいるにしたがって，空気はまことに爽やか，風の冷たさにホット一息入れる。美しい眺，大きな湖は深いるり色にさえ，はるかに帯の様に白く光る滝，窓におそいかかる山脈，山又山，ぽっかりと明るい駅チューリッヒにつき，知人（お医者さんの留学生）の出迎えをうけて観談しばし，遠い異国にある事をわすれる。こじんまりした美しい清潔な町である。湿気のないさわやかな空気に心地よく，久し振りに毛布をかぶって寝につく。翌日チューリッヒ湖畔を散歩，知人の坊やと街の水道栓より，スイスの水，待望のスイスの水を呑む。これまでのところずっと水が

大へん悪く，缶詰の水しか飲んでいないので，まったく水の味と云うものを，更めて味う。

「こちらでは水は労働者しかのまないのです」と知人に耳うちされた。道理で街をゆく人々がけげん顔で坊やと私を眺めている。私も音楽労働者。

スペイン「バルセロナ」

国技闘牛を見る。甲子園球場の様な大きなスタンド，このガランとしたコンクリートの建物に足をふみ入れるや，はや私はあのビゼーのカルメンの序曲のふんいきを体中に感じ全身の興ふんは自然と座席への足を早める。売子が大きい黒いぬいぐるみの牛を売りにきた。やがて場内も満員になり，行進曲風の簡単な音楽がなり出すと大きな黒の猛牛が一頭走り出てくる。4，5人の闘牛士があちこちから赤い布をかざして牛を怒らせ疲れさせる。やがてカルメンのエスカミリオよろしく一人の一段と美しい衣装の主役闘牛士が，英雄的な態度で手には剣を持って登場，観衆は総立ちの熱狂を以って迎える。牛はその主役によってたおされた，場内は狂える如くわれんばかりの興奮のるつぼと化する，私は然し，国技である闘牛，この人と牛の戦のあまりのせいさんさに思わず目を掩った。しかもこの殺伐な情景が偉大な作曲家の手によって，音楽化されてああした立派なオペラが生れるとは。とにかく，私はこの情景の中に，たしかにオペラ「カルメン」を観た。

夜，キャバレーでカスタネットを持ったスペイン舞踊やスペインの唄をきく。闘牛といいこの踊や唄等でスペインを存分に味うことが出来た。

フランス「パリ」

ここにきて始めてヨーロッパの中心に降り立った満足感をおぼえる。市街見物は到底わずかの滞在では廻り切れない。

パリ風景の一つモンマルトルの丘，若い街の絵かきさん達が沢山一かたまりになってせっせとカンバスに向っている，或はデッサンに余念なく個々様々な絵をかいている。

ナポレオンの柩の安置されているアンベリート寺院に敬意を表し，その名にふさわしい立派な柩に驚く。ルーブル博物館は，旧王宮で驚くばかりの大きなコの字型の建物。有名なミロのビーナスは折悪しく日本旅行中で留守，サモラテケの勝利像，レオナルド・ダヴィンチのモナリザ，ラファエルのマリヤと子供二人，ダビッドのナポレオン戴冠式等，名作の一部しか見る時間を持たなかったので真に残念である。もっとも何年経っても鑑賞し尽せない世界の芸術殿堂ではある。

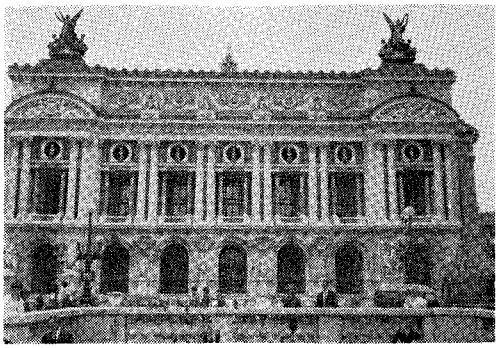
凱旋門前の大通りシャンゼリゼ通りは真夜中まで賑わい歩道にあるレストランの椅子に沢山の人が皆のんびりと話もせずに夜を楽んでいる。美しい深い樹木の並木道ばかりと思われる芸術の都パリであった。

シャンソンを聞き度いと思ってシャンソンの起りといわれるカボデズウブリエットに夜十一

時頃より行く。一番広いと云うコンコール広場の近くに普通の古びた小さな家の入口から薄暗い狭い石のらせん階段を一寸薄気味悪く感じつつ相当奥深く曲りくねって地下室に降りてゆく。狭い部屋のお粗末なステージの隅ではお婆さんがジャンジャンピアノを鳴らしている。すでに中年の男が真赤な服をきて小唄にまじえた面白い話に室内はコカコーラを呑みながら若い男女は楽しく笑いさざめいている。いわば寄席の様で舞台と客席が一つになって手拍子をうち声を合わせ，言葉が十分わかればどんなにか楽しいものであろうと思う。最後に若い美しい女性のシャンソン歌手が現われ一段と明るさを増し今までと異った，全くすばらしい立派な声でシャンソンをきかせてくれた。I女史の話によればパリの寄席の社会はわけてきびしいもので，このカボデズウブリエットは最高のシャンソン小屋でグレコその他のシャンソン歌手もここで育った由。

“トスカ”の舞台となったセント・アンゼル城

室内の壁には十字軍時代の遺品である牢獄で用いられた足かせや貞操帯等，もの凄いものが配列され奥の部屋はギロチン室，然しシャンソンの本場フランスでなければ味い得ない小粋きなものであった。翌夜は伝統あるパリ国立オペラ劇場で本場のバレーを見る。前夜の地下室と異り舞台も客席も豪華けんらん，赤と金の装飾は目にまばゆく私も持参の一級正装，舞台はまるで彫刻の人間像の乱舞，その高度な配色，音楽，すさまじいまでの強いステップ，この劇場の数ある専属の内の最高スタッフによる上演をみる事が出来たのは真に好運であった。


パリ国立オペラ劇場

オランダ「アムステルダム」

海面が地上より4メートル高いと云われ，地上げして建築しているので地盤がゆるみ少々傾いている大きなビルも見られる。

世界の90パーセントの花を輸出しているこの花市場は花にむせると云う言葉通り，国花チューリップは季節的になかったが，色とりどりの山の様な花の香に酔いしれる。美しい運河が街を縦横に流れている。ふときこえるオルガンの音，それは手廻しオルガンだった。荷車の様な車

にオルガンらしいものを積んで大きな車の輪を廻しながらゆっくりと街を歩いてゆく。私は大きな袋に一杯オレンヂを買いこんで小脇にはさんでしばらくこのオルガンのおじいさんの通り過ぎるのをぼんやりと見送る。他では見られぬオランダののどかな風景詩の一つでもあろう。絵葉書等でみるオランダの風車は，排水が機械化されて，今では遠く田舎へでもゆかねば見られぬとか。

イギリス「ロンドン」

他の国々と異なりここのガイドはイギリス紳士で私達を生徒の様に使う，まことに堅苦しい事である。街には珍らしく婦人帽姿，男は山高帽にステッキ姿。堂々たる赤い煉瓦造りのビル街，美しい広々とした道路，それに街ゆく人の落付いた色調の服装等，威儀正しく重量感あり英国紳士の実在をはっきり見る。

バッキンガム宮殿の衛兵の交替は毎日午前十一時，大急ぎでよく見えそうな前の広場の石段に上って，クラシックそのままの赤い服に黒の毛の高い帽子をかぶった衛兵の行進に私は童謡の「おもちゃの兵隊」を口ずさみながらシヤッターを切る。（なお，この衛兵の服装は，最近政局の変化にともない，新しい現代的服装に変ったと報じられている。）

夜はロイヤル・アルパートホールでヘンリーウッドのプロムナードコンサートをきく。このホールは平場が立見席でステージにはオーケストラの後方に植木等配し夏の夜にふさわしい雰囲気。先づ始めにコンサートマスターが現われる。立見席は足踏み鳴らし口笛吹いて拍手を以って喜び迎え次いでコンダクターが現れる。前にも倍して人々は騒然と之を迎える。当夜のピアノコンツェルトのジュリアス・カッチェンの演奏は実にダイナミックな熱情溢るるもので，又ホルンコンツェルトのあの管の音は今も尚耳に残りわすれる事は出来ない。

ドイツ「ベルリン」

東西ベルリンを見る。西ドイツは$\frac{2}{3}$，東ドイツは$\frac{1}{3}$の広さ，世界大戦で全体の六割が破壊されて今やっと二割住める様になったに云う。ヨーロッパを方々歩いて初めて戦禍の後をまざまざと見る，東には大きなベルリン・オペラハウスが破かいされたままの姿で残っている。東西ドイツをへだてる壁は48キロに及び15米間隔の二重壁，昭和34年ソ連によってこの鉄の扉が造られベルリン人同志否肉親同志でありながら別れていなければならないと云う。その当時人々が西へ逃れようとして発見され射殺された所には花輪が飾られてある。ニュースでは度々聞いた事ではあるが日本では想像出来ない現実にぶつかって，心のしめつけられる思いであった。

東へはいるには観光客のバスのみ特定の場所から通過を許される。但しガイドは西の人は降りて東の人が乗る。そしていかめしいソ連兵の厳重なパスポート検査もあり異様な緊張を感じる。偶然にも空は急に曇り激しい雷を伴った雨風が吹き尚更この暗い空気をかきたてる。そして寒さをひしひしと心身に感じつつうすいコートの衿を立てて東を出る。何だかホット明りのついた様な軽い気持になって西の燈のまばゆい商店街等楽しく見る。

ドイツ「ボン」

ケルン飛行場よりボンのベートーヴェンハウスを見る。ここでベートーヴェンが生れたと云うのは貧しい屋根裏の部屋，10才位まで使った，古めかしいオルガン，その小さな家に記念館を増築してベートーヴェンハウスとなっている。狭い中庭には美しい花が咲きみだれ胸像が立てられ幼いベートーヴェンがたわむれ遊んでいる姿が思い浮ぶ。

ベートーヴェンハウスの中庭

そこからほど遠くない町にシューマンがわびしい最後の日々を送ったと云う精神病院をみる。ここは旗をたてて彼の胸像が額にかかげられているだけ，あの偉大なシューマンがこんな粗末な療養所で1856年に死んだのかと思うとまことに胸が痛む。

オーストリヤ「ウイーン」

フランクフルトからウイーンへとぶ。世界大戦で破壊されたが今はすっかり立ち直り美しくゆったりとしたおちつきを見る。

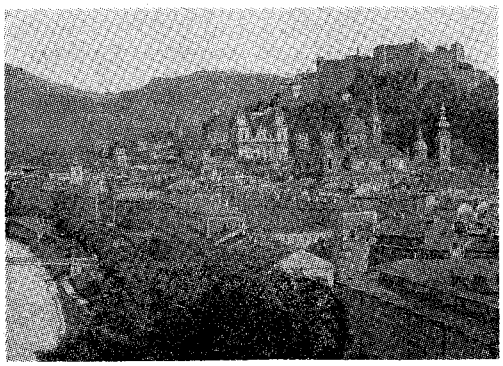
国立オペラ劇場はシーズンオフで之も内部見学。但し大使館のきも入りで私共の為に全館照明はあかあかとともされ，シャンデリヤはキラキラと輝き歓迎される。60のオペラがいつでも上演出来る舞台装置が準備され一年に一回平場の坐席が全部せり上り大舞踏会が開からる等驚く事ばかり。外観はとても質素で内部は全くごうかけんらん。指揮者カラヤンがすべてに絶対的権限を持っている。

女帝マリヤテレーザの夏の宮殿であるシェンブルーンパレスは部屋数4000，その庭はあまり広くて向うの方はかすんで見えない。リスの走り廻るきれいに手入された樹木の間を家族づれの散歩や若人同志の木蔭の語らい等，風景画を見ている様。そのあとドナウのさざなみを左に見ながら風が音楽をもたらすウイーンの森へ走る。途中名物のワインを作る酒造の家，それが又酒場でもある。小さな町ハイリゲンを通る。ここにあの有名なベートヴェンのハイリゲンシュタットの遺書のかかれた家がある。夜ともなれば酒と歌の賑やかな街に化す。

オーストリヤ「ザルツブルグ」

ウイーンより三百キロをバス旅行，このチロル地方の景色はまことに美しくアルプスありモンスー湖あり放牧あり，ビロードの草原ははてしなく，大地は広がりすばらしい油絵をみている様である。やがて五時間の後にお城のある街ザルツブルグにつく。ここはモーツァルト生誕の地で毎年夏季ザルツブルグ音楽祭としてヨーロッパはもとよりアメリカから，世界中の一流

音楽家の演奏会があちこちにある王宮や劇場で開催される。従ってシーズンの間はこの小さい街が各国からの観光客で大へん賑う。小高い丘には古城あり，古い尖った寺院があちこちに，街の中央に流れの早い美しい河あり，両岸には大きな樹木，街にはホロ馬車が通り，店の女の子はチロル地方のあの民族衣装をつけていてまことに好ましい風景。こうした美しい風土なればこそあの偉大なモーツアルトの芸術が生れた事も当然の様に思い，そしてすばらしい空気を吸って，モーツァルトの曲をほんとに感じる事が出来た様なうれしい気分に浸る。かねがね一度ザルッブルグの音楽祭に行って見たいと思っていた事であったので，この土地をふんでほんとによくぞ思い切って来た事だと思う。楽聖モーツァルトの記念館，ザルツブルグ音楽学校等見学。音楽祭としての催物のオーストリヤ郷土芸術のマリオネットは伝統あるアイヘル一家によって，当日はモーツァルトの「魔笛」が上演された。好ましい操り人形，格調高いものであった。偶然にも畑中良輔氏に会い同氏から他に類例のないセントピエトロのミサを是非きく様にとすすめられる。



ザルツブルグの街(丘の下にセントピエトロ寺院がある)

翌夜，ミラベル城のミラベル宮殿の一室でザルツブルグ音楽学校教授のバリトンのワルテル・ライニンゲル氏のリード・アーベントをきく。34,5才の若さで円熟せる演奏は美声と迫力に充ちたものであった。同じ宮殿で，翌夜はスメタナのすばらしい室内楽であった。

次ぎに翌日午前十一時より，畑中氏指示の待望のミサ。セントピエトロは小高い丘の麓にある古い寺院である。聖堂内はすでに満々員，自分の席を見つけるのに容易でない。赤い壁は金色の唐草模様を配して荘厳な内にも明るく美しい。簡単な牧師の挨拶の後いづこともなく遙か後方より静かな音楽，モーツァルトのc—moll ミサが響き始める。その管弦楽と合唱の雄大なる音楽は聖堂も人もいつしか混然と一つに包み，宗教と云ってよいのか，宗教の音楽なのか音楽が宗教なのか，直接心にふれる偉大なる音楽の力，その神秘に包まれてしまった。それは口にも筆にも到底現わし得ない感動である。全曲終って，拍手もなく挨拶もなく静かに立ち上って大勢の人は小さい出口から肩のふれ合いもせず話合いもなく黙々と出て行くのであった。」それは，かって音楽会場で度々聞いたミサとは全く異った感激という他なく，私のヨーロッパ音楽行脚もここに極まるの思いであった。ミサのバリトンソロは前々夜のワルテル・ライニンゲル氏がつとめた。

ドイツ 「ミュンヘン」—「ウイスバーデン」—「ハンブルグ」

夜ホテルへ馬淵先生（キール大学に留学中）が来られる。久し振りに学校の事など話合う。先生は大へん元気ですでに恵まれた研究生活をつづけられて楽しく幸福そうであった。一諸に

有名なビヤホールへ行く。

ウイスバーデンで一泊後ビンゲンよりコブレンツまで三時間ライン下りをする。両岸の丘には古城，ポプラの林，菩提樹の茂み等美しく，唱い親しまれている，ローレライの岩のあたりでは，きれいなあのローレライの唄の男声合唱（船内放送）が流れに和す。ふとふりかえるとその山々は入日に赤く映えていた。デュッセルドルフの空港よりハンブルグへ，そして一泊の後終着駅コペンハーゲンへ向う。

デンマーク「コペンハーゲン」

真白いフランスの船が岩壁に横付けされている。水際近く，アンデルセンの童話で知られている人魚姫の彫刻はやさしい姿で迎えてくれる。国会議事堂（クロンボルク宮殿）の部屋々々のシャンデリヤはヨーロッパ第一のもので宝石のかたまりがキラキラと眼を射る。デンマーク王は代々音楽好きで王室付オーケストラを持たれ作曲もされればヴァイオリンも弾かれると云う。クラシックなグランドピアノの彫刻が金色に輝いていた。

帰途は成層圏より北極の灰色の氷海を下に見てアラスカ経由，オホーツク海あたりから荒模様で機は大ゆれにゆれたが後で思えば之も楽しい旅の想出の一こまであった。各国を通じて道路や公園の清潔さ，之もまた国民性か文化の高さか羨やましく感じている。

後記

旅行中にきいた主な演奏会のプログラムは次の通りである。

地名	日時	曲目	演奏会場
Rome	July 23	"AIDA"	Terme di Caracalla
Paris	July 28	Ballet-performance Suite En Blanc (Serge Lifar) But (Michel Descombey) Le Palais De Cristal (G. Balanchine)	Théatre National De L'Opéra
London	Aug. 1	Henry Wood Promenade Concert Philharmonia Orchestra Conductor: Charles Mackerras Soloist: Alan Civil Julius Katchen	Royal Albert Hall
Salzburg	Aug. 6	1.) Marionetten von Salzburg "Die Zauberflöte" 2.) Liederabend Walter Raninger	Salzburger Marionetten-Theater (Mirabell Castle)
Salzburg	Aug. 7	Smetana Quartett (Salzburger Schloßkonzerte) Haydn, Mozart and Janacek	(〃)
Salzburg	Aug. 8	Salzburg Festival W. A. Mozart: c-moll-Messe Dirigent: Bernhard Paumgartner Mozarteum-Orchester Salzburger Rundfunk, Mozarteumchor	Erzabteikirche St. Peter (St. Peter Church)

（本学教授——声楽）